

北國新聞

発行所
北國新聞社
〒920-8588
金沢市南町2番1号
番号案内(076)263-2111
富山本社 番号案内(076)491-8111
〒930-8520 富山市大手町5番1号
©北國新聞社 2009年

ふるまひとから挑戦

第6話 常識を破れ

①

(敬称略)

昨年暮れ、金沢市の金大附属病院で「アウェイク(覚醒)」と呼ばれる手術が行われた。メスを握ったのは心肺・総合外科教授の渡邊剛(四九)である。ついさっきまで、手術台で胸を切り開かれ、脈打つ心臓をむき出しにしていた男性患者が「先生、ありがとうございます」と言いきり、笑顔で礼を言った。渡邊も表情を緩め「明日には歩けるようになりますよ」と応じた。

このバイパス手術を、心臓を動かしたまま、しかも意識を覚醒させたままで行うのが「アウェイク手術」である。国内でこれができるのは、渡邊ただ一人。世界でも渡邊を含め二人しかない。渡邊が「ゴッド・ハンド(神の手)」や「スーパー・ドクター」と称されるゆえんである。

世界で2人

「冠動脈バイパス手術」は現在、心筋梗塞の患者に広く行われている治療法のひとつである。コレステロールが詰まるなどして、血の流れが悪くな

る冠動脈バイパス手術は、薬でいったん心臓を止め、人工心臓をつないで行うのが普通だ。「心臓を止めない」と、血管を

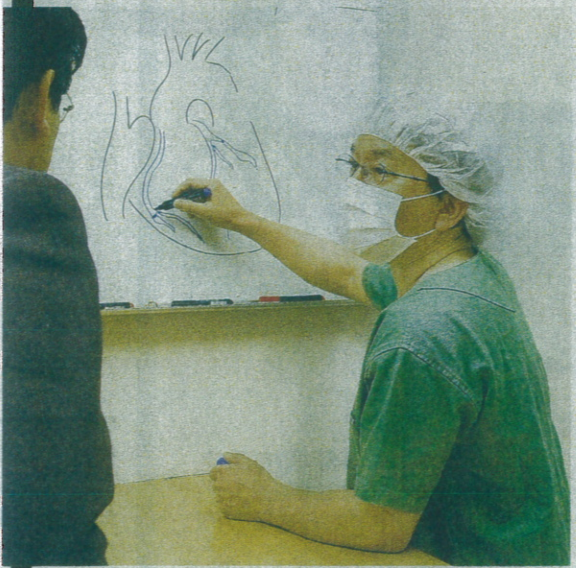
手術止めず心臓 「神の手」と称賛

つなく緻密な手術はできない」と誰もが考えていたからだ。三十四歳の若さで、渡邊はこの常識を覆した。富山医薬大(現富山医学部)の講師だった一九九三(平成五)年、心臓を動かしたまま行う「オフポンプ手術」に国内で初

めて成功する。留学先のドイツで二例見ただけのオフポンプ手術を頭の中で組み立て直し、再現してみせたのだ。若い渡邊の成功の報は医学界を駆け巡る。

「殺人行為だ」

絶賛の声とは裏腹に、



高名な教授から「こんな危険な手術、誰がやるか」「殺人行為だ」と、公然と批判が出た。だが渡邊は、ひるむことなく、技術を惜しみなく広めた。現在、金大附属病院のバイパス手術はすべて、オフポンプで行われている。今やオフポンプはバイパス手術のスタンダードになろうとしている。

渡邊がオフポンプにこだわったのは訳がある。心臓を止め、人工心臓を使う手術では、血管内部にたまった血栓が脳の血管まで運ばれ、脳梗塞を引き起こす恐れがあった。渡邊はこの危険から患者を解放したかったのだ。もっとも、オフポンプ手術は短時間で血管をつなぎ合わせねばならず、医師には高度な技術と習熟が必要となる。渡邊は「オフポンプ」の成功にも満足しなかった。こんなことができないかと、いつも考えていた。「もっと切り口を小さく、もっと執刀時間を短く、もっと患者の負担を軽く」。そんな時、麻酔医の友人の言葉にピンときた。「そつだ、麻酔を変えればできるかもしれない」。誰も考えつかなかったアウェイク手術の誕生に、かすかな光が差し込んだ。(藤澤瑛子)

バイパス手術を終え、患者の家族に内容を説明する渡邊。1月6日、高岡市の厚生連高岡病院

北國新聞

発行所
北國新聞社

〒920-8588
金沢市南町2番1号
番号案内(076)263-2111

富山本社 番号案内(076)491-8111
〒930-8520 富山市大手町5番1号

©北國新聞社 2009年

ふるまひとから挑戦

第6話 常識を破れ

②

(敬称略)

心臓を動かしたまま行う冠動脈バイパス手術に、国内で初めて成功した渡邊剛は、患者の負担軽減につながる手術をさらに追求していた。この中で生まれたのが前人未だの「アウェイク(覚醒)手術」である。

同僚がヒント

「硬膜外麻酔を使ってみないか」。富山医大(現富大医学部)で同僚だった麻酔医杉木圭吾(四九)が渡邊にそう提案したのは、オフポンプ手術の成功より前の、一九九二(平成四)年のことだった。

この年、不本意ながら富山医大へ赴任した渡邊に、手術中の麻酔管理

のいろはを教えたのが同い年の杉木である。多くの手術をともにする中で、杉木は「渡邊なら、これまでできなかった新しい手術ができる」と確信していた。

硬膜外麻酔とは、意識を保ったまま、体の一部分の感覚をなくす「局所麻酔」の一種である。効果は優れているが、全身麻酔よりもかけるのが難しく、手術中の管理も大変なため「麻酔医が好まない麻酔」とされることは渡邊も知っていた。

「この麻酔を使えば、これまで手術をあきらめるしかなかった重篤な患者も手術が受けられるよ

麻酔を工夫 「覚醒」手術成功



執刀中の渡邊
—高岡市の厚生連高岡病院

うになるんだ」。気が付けば、熱く語る杉木の意見にどんどん傾いていく自分がいた。

それまでのバイパス手術は、全身麻酔を使うのが常識だった。しかし、それには大きな問題があった。全身麻酔は体への負担が大きく、肺や脳が弱っている高齢者らの場合、麻酔がかげられず、手術できないケースがあった。

二人は硬膜外麻酔を使ったバイパス手術を「アウェイク手術」と名付け、検証を重ねる。本当に安全なのか。自分の力量でできるのか。渡邊は時間をかけて「いける」という確信を深めていく。

オフポンプ手術が軌道に乗った九八年、渡邊と杉木は満を持してアウェイク手術に初挑戦し、無事成功させた。その後、国内で行われたアウェイク手術は既に、八十例を超え、執刀者は今も渡邊ただ一人。執刀する心臓外科医はもちろん、麻酔科医にも熟練の技が求められるため、有用だと分かっても、簡単に踏み切れないのが実情なのだ。

「99%が努力」

心臓外科の最先端を走り続ける渡邊の姿は、周囲に孤高の存在と映った。「神の手」はたびたびメディアに取り上げられるようになり、全国から患者が富山医大の門をたたいた。

だが、そんな賛辞にも本人は意に介するふうもない。「僕は神の手じゃない。「普通の手」でいいよ」。「神業」と言われることを拒むのは、それが努力の賜物であることを自分が一番よく知っているからだ。「99%、努力だろうね」。天才外科医の努力を知る者は少ない。(藤澤瑛子)

北國新聞

発行所
北國新聞社

〒920-8588

金沢市南町2番1号

番号案内(076)263-2111

富山本社 番号案内(076)491-8111
〒930-8520 富山市大手町5番1号

©北國新聞社 2009年

ふるさとから挑戦

第6話 常識を破れ

③

(敬称略)

「ほら、針を抜いた時にはもう次に刺す角度になっているでしょ」。渡邊剛が週の半分を過ごす東京医科大病院。渡邊の執刀するバイパス手術のモニター画面を見ながら、心臓外科の講師牛島輝明(四三)が説明する。

負担は軽くなるから。渡邊の哲学は明快だ。

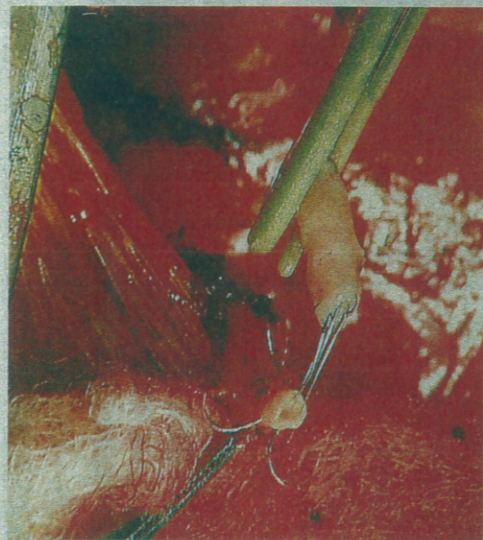
人生決めた漫画

「天才外科医」「神の手」。意識を保った中で行う冠動脈バイパス手術「アウェイク」を生み出した渡邊はとかく、伝説の人物のように語られることが多い。だが、渡邊の支えは自ら「99%、努力」と語る下積みにある。

渡邊は、鉛筆の芯ほど細い血管を縫うため、目に見えないような細かい糸をピンセットで挟んで血管に刺していく。他の医師なら、抜いた糸を持ち替えたり、刺す場所をためらったりするが、渡邊に迷いはない。だからこそ、六時間はかかるバイパス手術を三時間弱で終わらせる。「手術が短時間なほど、患者の

「天才外科医」「神の手」。意識を保った中で行う冠動脈バイパス手術「アウェイク」を生み出した渡邊はとかく、伝説の人物のように語られることが多い。だが、渡邊の支えは自ら「99%、努力」と語る下積みにある。

ブタの心臓で特訓 富山で雌伏8年



渡邊による冠動脈バイパス手術で、血管が縫い合わされる瞬間

ら借りた漫画、手塚治虫の名作「ブラックジャック」だった。

「高額な報酬を要求する天才外科医だけど、実は人情に厚く、決して患者を見放さない。そんな姿にあこがれてね」。生死の喜びや悲哀、医療の問題点を鋭く描き出した「ブラックジャック」

に渡邊は夢中になった。心臓外科医を志して金大医学部に進学。卒業後の八九(平成元)年からドイツに渡り、ハノーファー医科大で腕を磨く。

誰一人、知り合いのいない異国の地で、昼は手術の手伝い、夜はブタの心臓で血管をつなぐ練習に明け暮れた。多くの医師が絶賛する針さばきは「一つの心臓で三十回は練習した」という特訓のたまものなのだ。

「教授になる」

九一年、留学を終え、意気揚々と金沢に戻ってきた。ところが「さあ、やるぞ」と腕をまくる渡邊を待ち受けていたのは、外国帰りの有望株を疎む、嫌な雰囲気だった。翌年、富山医薬大に赴任させられ、辛酸をなめる。「絶対教

授になって金大に戻ってやる」。泣き言を封印し、金大教授に照準を定めた。

富山医薬大で、手術の一から十までを担当したことで、外科医の腕にさらに磨きがかかる。二〇〇〇年の教授選を勝ち抜き、金大医学部外科学第一(現心肺・総合外科)教授の座を射止めた。四十一歳、異例の若さだった。医師としての実力が政治力をねじ伏せ、有言実行したのだ。

若い外科医が「ブラックジャック」に変貌する機会を与えてくれたと思えば、富山の八年間は決して無駄ではなかった。

(藤澤瑛子)

北國新聞

発行所
北國新聞社

〒920-8588

金沢市南町2番1号

番号案内(076)263-2111

富山本社 番号案内(076)491-8111

〒930-8520 富山市大手町5番1号

©北國新聞社 2009年

ふるまひとから挑戦

第6話 常識を破れ

④

(敬称略)

手塚治虫の「ブラックジャック」にあこがれて心臓外科医を目指した渡邊剛は、地道な下積みをして土台に、ヒーローを体現する名医となった。その手は今、冠動脈バイパス手術にとどまらず、多くの患者を救っている。

日本一の早さ
たとえば、破裂すれば命にかかわる大動脈瘤。渡邊は人工血管で大動脈を補強する「ステントグラフト療法」を行う。こぶができた大動脈に人工血管を入れ、内側から補強する方法だ。胸を開いて人工血管と付け替える従来の手術に比べ、傷口は小さく、手術時間も五分の一の約一時間です

む。その早さは日本一と称される。大動脈弁狭窄症は、左心室から大動脈へ血液を流す弁が狭くなる病気だ。大動脈を切って人工弁に取り替えるには、心臓を止める必要がある。これも、時間が長くなれば患者の負担は増す。東京医科大学病院では二〇〇二(平成十四)年から〇四年にかけて、弁膜症手術で患者が亡くなる事故が相次いでいた。当時は三―四時間も心臓を止めていた。立て直しのため、請われて着任した渡邊が腕をふるうようになると、心臓停止時間は約三十分と、劇的に短縮

「シンプルに手術」 ロボットが相棒



渡邊の相棒として精密な心臓手術をこなす「ダヴィンチ」
—金大附属病院

された。「日本人は症例が少ないためか、一つの手術をじっくりとやりがちなんです。これがトラブルの元。もっとシンプルにや

ればいい」。渡邊の口癖である「シンプルには、自分の判断に迷わない自信と確かな手技があつてこそだ。」
○五年九月、金大附属

病院に手術用ロボット「ダヴィンチ」が導入された。日本に数台しかないこの機械を心臓外科手術に使うのは、国内では金大と東京医科大学だけだ。渡邊は「ダヴィンチ」を相棒とした手術の開発にも情熱を注ぐ。

一つは、女性に多く発症する「心房中隔欠損症」。心臓の右心房と左心房を隔てる心房中隔に穴が開く病気で、肺から左心房へ戻った新鮮な血液が全身に運ばれる前に右心房へ逆流してしまい、体力の低下や肺高血圧症を引き起こす。

胸を大きく切開するしかなかったこの治療を、渡邊がダヴィンチで行うことに成功すると「傷口

が小さく目立たない」と女性患者の支持を得た。

人間以上の腕前

さらに、冠動脈バイパス手術でさえも、小規模な場合なら、ダヴィンチを使う。渡邊が画面をのぞきながら操作盤に触れると、数センチの切開口から体内に入った二本のロボットの手が、人間の手と同じ動作で血管を縫い合わせていく。

「人間にあるくわすかな手の震えがない分、ダヴィンチの方が精巧に動くんです」。上には上がある。しかし、上には上いたのはロボットだった。渡邊はこの物言わぬ相棒にさらなる夢を託す。
(藤澤瑛子)

北國新聞

発行所
北國新聞社

〒920-8588
金沢市南町2番1号

番号案内(076)263-2111

富山本社 番号案内(076)491-8111
〒930-8520 富山市大手町5番1号

©北國新聞社 2009年

ふるさとから挑戦

第6話 常識を破れ

⑤

(敬称略)

夏休みも終わりに近づいた昨年八月二十七日、金大附属病院二階にある心肺・総合外科の医局に白衣を着た子どもたちが集まった。ほおを紅潮させ、真剣な表情でモニター画面を見つめる。渡邊剛が主宰した親子体験学習会の参加者である。

目を輝かせる

「しんぞうってどうやってなおすの?」と題されたこの体験学習会は、渡邊による手術の生中継や手術用ロボット「ダヴィンチ」の操作体験などが人気で、昨年で三回目を数えた。この日、渡邊の手術を見たり、生のブタの心臓を解剖して仕組みを学んだ子どもたちは

「自分も医者になって人を助けたい」と目を輝かせた。「お金や地位に惑わされず、純粋な子どもで医療を見てほしい」。これが、大学人であり、医師であり、そして五児の父である渡邊の素直な気持ちだ。体験学習会を企画したのも、プロの仕事を直に見ることが日本の未来を担う子どもたちにとって職業を真剣に考えるきっかけになるとの思いからだ。

医療は立派な資源 子どもに夢託す



渡邊が主宰した体験学習会の一コマ
—昨年8月27日、金大附属病院

の穴を開けるだけで、心臓治療が可能になるといふのだ。「午前中に手術を受けて、夕方には歩いて帰ってもらおう」。患者に優しい医療を追求する渡邊は、そんな青写真を

描く。夢の実現に向け昨年、日本ロボット外科学会を設立した。ダヴィンチを使いこなせる医師を増やすのが目的だ。どんなに機械が進化しても、それ

を使うのは人間である。だから日本に分があると渡邊は言う。意外な一面である。

「心臓や脳など高度医療の医師をしっかりと育てれば、海外からも患者が来るでしょう。二十一世紀の日本は、良質な医療を世界に提供していくことを考えてもいい。日本には資源がないと云うが、この国の医療は立派な資源だ」

手術室に入る前に、渡邊は医局にある神棚の前で必ず手を合わせ、塩で手を清める。手術中、「もうだめだ」と覚悟した難局を何度も乗り越えた経験から、手術室には神が宿ると信じているのだ。

「有能な外科医」のイメージに合わない、渡邊の

「すべては患者さんのため」。心臓手術の常識を破り続けてきた男の目には、誰もが安心して手術を受けられる未来が映り始めた。(藤澤瑛子)

(第6話おわり)